ヨハネ福音書 21 章 15～23 節　　2024/04/28

信徒K

「希望を告白する」

開会聖句　ヘブル人への手紙　10 章 23～24 節

「約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。」

はじめに

ヨハネ福音書の最後になりました。3 年年読んできましたが、ヨハネは珍しい記事が多かったですね。今日の最後もそうで、一旦 20 章で筆を置いたのに、追加したと考えられています。書き足す必要が生じたからで、かなりプライベートなことです。メインはペテロの召し。ここから、今日はペテロの召しとヨハネの召し、そして私たちの召しについて考えます。

本論

Ⅰ. ペテロの召し

先ず、前半の1～14節から。場所はティベリア湖。イエスさまの活動の中心であったガリラヤ湖のローマ名。彼らがここにいたのは、生前のイエスさまの命令（マルコ 14:28）だから。復活の墓の中にいた人物によっても繰り返されてます（16:7）。復活のイエスさまは、20 章で 2 度彼らに会われましたが、それで、彼らの沈んだ心が解消したわけでありません。まだ御霊が降ってませんから、彼らにはこれから先のことが全くわからない不安の中にいます。集まっているのは 11 人の弟子のうち、たぶんガリラヤ出身のメンバー。彼らは恐らくお腹が空いたのでしょう。ペテロたちは元漁師でしたから、漁に出るのですが、魚は網にかからず、夜は過ぎ、明け方になり、空腹が募ります。その時、岸辺に立つ一人の人が「網を右側に」と声をかけます。従うと、おびただしい魚がかかってます。それで、それがイエスさまだとわかって、急ぎ岸に戻ると、おこされた炭火と魚とパンがありました。彼らは 5 つのパンと 2 匹の魚の奇跡に大興奮したことを思い出し、このひととき、心もお腹も満ち足り、励まされたのではないでしょうか。しかし、心から素直に喜べない人物、ペテロがいました。7 節で真っ先に行動してはいますが、あの失態以来、ペテロの存在は控えめに思います。ここでも、そうです。彼の心にはイエスさまへの壁がありました。ペテロの心はずっと傷んでいました。食事のあと、それを知るイエスさまはペテロに近づき、「わたしを愛しているか」と問いかけました。

なぜ、この 21 章が追加されたのか？ペテロはパウロとともに、宣教の最前線に立つリーダーでした。彼はパウロと違って、ふさわしい家柄も知識もない漁師でしたが、イエスさまといる時から、皆が認める弟子たちのリーダー的存在でした。しかし、主を3度も否んだというペテ

ロの失敗は、新しい異邦人教会の中の反対者たちを元気づけていました。それに対して、ヨハネはこの会話を記すことで、このペテロの失敗については、すでにイエスさまと解決済みで、イエスさまから確かに召しをいただいたリーダーだと報告しようとしたと考えられます。

イエスさまが、ペテロに 3 度（15, 16, 17 節）も「あなたはわたしを愛していますか」と尋ねられたのは、ペテロが 3 度否んだからです。15 節の「あなたは、この人たちが愛する以上に…」という質問は、以前に、「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません」（マタイ 26：33）と言ったからでしょう。ペテロはあれ以来、まざまざと自分の弱さと愚かさを痛感していましたから、以前のように強気ではなく、とても控えめに答えています。イエスさまの使われたアガペーではなく、フィレオ―を使って、「私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」と自分の愛を告白しました。その度に「わたしの羊を飼いなさい」と言われました。イエスさまは 3 度の問いかけをしながら、彼にイエスさまへの忠実な愛を確認させ、「わたしの羊を飼いなさい」というリーダーの役割を与えました。

イザヤ４２：3にメシアは「傷んだ葦を折ることなく、くすぶる灯心を消すことのないかた」と紹介されてます。葦は折れやすく、灯心はくすぶる。でも、メシアは折れやすいものでも折ってしまったりしない。くすぶってるものでも消してしまわない方。イエスさまは何事も権威をもって命じることができますが、決して力づくではなさいません。そばにいて仕えるものとなって、励まされる方です。私たちにとってもそうです。私たちは自分の失敗や無力に落ち込むことが多いのですが、イエスさまはくすぶる灯心のような者を、励まし、世に輝く光として用いてくださるのです。

Ⅱ．ヨハネの召し

次に短く、ヨハネの召しについて考えてみます。21 章を書いたのは、ペテロの確かな召しと、23 節「その弟子は死なない」という噂の誤解を解くためです。イエスさまがペテロの死に方まで言われたとき、後ろにいるヨハネのことが気になり、「この人は？」と尋ねます。イエスさまは２２節「わたしが来る時まで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。」と返答されました。そのことばが、この弟子は死なないという噂になって、広がっていたので、それはイエスのことばの誇張であって、たとえそうであっても、それはあなたには関係ないでしょということだったと、ここで訂正をしました。

しかし、死なないことはなかったけれど、彼は誰よりも長生きしました。彼のその後の情報はヨハネの黙示録を執筆したことです。パウロとペテロはネロ皇帝の迫害で殉教（67 年頃）。昔テレビの洋画劇場で「クオバディス」（主よ、どこに行きたもう）という映画を見ました。クリスチャンがライオンの餌食に、それが見世物にされたりする、私の迫害のイメージはここからです。ペテロがローマから去るとき、主に出会い、クオバディスと尋ねると、ローマへもう一度十字架にかかり行くと言われた。主のそのことばを聞き、彼は戻って殉教した伝説も描かれています。

ヨハネは生き延び、第二次クリスチャン迫害（ドミティアヌス皇帝 81～96）の時に、黙示録を書き、苦しむ教会を励ましました。1～3章には、アジアの 7 つの教会が出て来ます。支配者の目を恐れ、当時の読者だけにわかるように「黙示」という特別な文学スタイルで書かれているので、難解なところです。彼の召しは、パウロやペテロのように、宣教の最前線というより、後方で教会という群れを守っていくことだったと思います。彼は十字架の上のイエスさまから母マリヤのことを託されました。それは、血縁を超えて、神の家族として生きるようにということだと以前話をしました。彼は教会という神の家族を支える。それが彼の召しだったと思います。

終わりに

今度は私たちの個人的な召しではなく、この時代を生きる私たちの召し、神さまが私たちに期待しておられることを考えます。今日の開会聖句はヘブル 10：22～23「**約束された方は真実な方ですから、私たちも動揺しないで、しっかり希望を告白し続けようではありませんか。…**」希望こそ人を生かす力です。今日帰ったら、とっておきのあれを食べようというだけでも力がでます。ここは迫害が厳しさを増し、信仰を捨てる人が出て来た状況での励ましです。彼らの希望は**再臨**でした。黙示録は 22：20「『しかり、わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来て下さい。…」で終わります。昇天されたイエスさまがまた同じように戻ってきてくださる。それが希望でした。しかし、イエスさまは来ず、時間が過ぎ、教会は信仰があれば、滅びないで**天国**に行き、また**復活**するという希望を持つようになりました。だから、一人も滅びないで全員がクリスチャンになるように、日本にも宣教が広がりました。勿論、これは私たちの大きな希望ですが、もう一つ付け加えたい希望があります。それは、**シャローム（平和）**という希望です。

聖書は個々人の救いだけでなく、その人たちを通して神の価値観が実現し、神の願うシャローム、神の国が実現していくという神さまの計画が記されています。だから、イエスさまは「神の国はあなたがたのただ中にある。」（ルカ 17：21）と言われました。人間関係の中に神の願いがなされていくなら、そこに神のシャロームが現われます。しかし、人間が築いてきた社会は益々綻びが目立ち、特に人間関係は難しくなってきています。一つの記事、虐待される子どもと関わる現場の方の記事を紹介します。「子どもを取り巻く社会は、神さまへの祈り、嘆きをなくしては、受入れることができないような不条理に満ち溢れています。『なぜ、この子が・・・』と問いかけます。神さまの計画をすべて理解することはできません。しかし、どのような境遇でも、信じることができない現実を前にしても、神さまには平和の計画があるのです。私の役割は、誰も希望を見いだせない状況にあっても、神さまの計画に希望があることを信じ、祈ることです。勿論…」　聖書の神さまを信じる私たちに期待される召しは、それでも、神さまの平和の計画があるという**希望**を信じ、祈り告白することだと思うのです。一つのみことばを読んで終わります。エレミヤ 29：11「**わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている－主のことば－それはわざわいではなく、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるものだ。**」